



博物館だより

横須賀市自然・人文博物館
神奈川県横須賀市深田台95
046-824-3688

<http://www.museum.yokosuka.kanagawa.jp>



もくじ

巻頭特集：特別展示「探検！スズメバチと身近な昆虫の世界」	1
横須賀市の川を上るアユ	2
古代、文字の読み書きはエリートの証？	3
商店街で「おでかけ博物館」を開催しました	4
カルガモ親子のお引越し 天神島臨海自然教育園	4

巻頭特集 特別展示「探検！スズメバチと身近な昆虫の世界」

2018年夏の特別展示は「昆虫」。今年は、奇しくも国立科学博物館の特別展「昆虫」と同時期同テーマの展示となりました。あまり知られていませんが、2018年は当館の前身である横須賀市博物館が久里浜に開館してから64年目、つまり64（ムシ）の年の展示でもありました。

またとないタイミングで巡ってきた昆虫の展示に際して、当館では昆虫に関する2つの研究活動の成果を反映させました。それが「スズメバチ」と「身近な昆虫」です。

「スズメバチ」は、2010年から市の保健所と共同で行っている「横須賀市におけるスズメバチ類のベイトトラップ調査」の成果を反映させました。スズメバチといえば「怖い・危険な」昆虫として知られ、この調査は市内のスズメバチによるリスクを、捕獲によって直接的に、あるいは対策に欠かせない生態を把握するなどして間接的に、低下させることを目的としています。展示では、ふだん遠巻きでしか見ることができないスズメバチの形や模様を近くで見ただけのための標本や、もしも巣の中を「探検」したらどうなるかを体験していただくための大型模型を設置しました。特別展示終了後、スズメバチの大型頭部模型は自然館に移設しました。



「身近な昆虫」は、三浦半島の昆虫相（地域に分布・生息しているすべての昆虫の顔ぶれ）をイメージしやすいよう、比較的身近で見つけやすい昆虫たちを、なるべく広い分類群から、種数の多さを反映させて抽出した「三浦半島の基本昆虫種」という活動を反映させたものです。既にご存じの虫や、こんな虫も身近にいたのかという虫、約700種を展示しました。展示された標本や写真を通じて、野外へ様々な昆虫を見つける「探検」に出かけてみましょう！

(昆虫学担当 内船)

編集後記

今年度より「自然教育園だより」を「博物館だより」と名称を改めて発行することにしました。教育園の出来事に加えて、博物館の最近の話題や、特別・企画展示の見どころ、学芸員の研究内容などを、わかりやすく伝えていきたいと思っております。(柴田)



横須賀市の川を上るアユ

日本の夏の風物の一つに「アユ」があります。

アユ（学名：*Plecoglossus altivelis altivelis*）は本州、四国、九州と北海道の一部、朝鮮半島に分布するアユ科の魚で、成長にともなって川と海と行き来する「両側回遊魚（りょうそくかいゆうぎょ）」として知られています。アユは晩秋に川で産卵し、生まれた稚魚は川を下って海で生活し、翌年の3月前後から川を上り始めます。また、同じように川と海を行き来するサケとは違って、必ずしも生まれた川に上るわけではないため、繁殖が確認されていないような小さな河川にもよく上ってきます。ここで気をつけたいのは、アユは川に上ってくるまで採集することが法律で禁止されている魚だということです。海のアユは、他の魚では許されているようなタモ網ですくったり釣り上げるといったことも違法行為となります。

2018年、相模川を上るアユの若魚の個体数が過去20年で最も多く、前年の2倍以上となっていることが報道されました（2018年5月2日神奈川新聞）。横須賀市の相模湾岸でもアユの若魚の数は例年より多かったようで、毎年多数のアユが観察される秋谷の前田川をはじめ、例年はアユの数が多くない長坂の松越川や長井の川間川などでも4月頃から全長3～5cmのアユの稚魚が群れているようすが観察されました。

これらのアユはこの後、どのような暮らしをするのでしょうか。

相模川のように大規模な河川では、稚魚期に動物プランクトンを食べていたアユは、上・中流域の瀬に縄張りをつくって石についたコケ（珪藻類）を食べる植物食に食性を変え、全長20cmを超える大きさに成長し、その年の秋には産卵を終えて寿命を迎えます。しかし、横須賀市の相模湾岸に見られるような小規模な河川では、縄張りをつくって大きく成長できるものはごく一部で、ほとんどの個体は動物食のまま全長10cm程度までしか成長せず、産卵をしないで生涯を閉じます。そのため横須賀生まれのアユはごくまれにしかあらわれず、ほとんどは他の地域の大規模河川で生まれたアユなのです。

アユと時期を同じくして海から川に上ってくる魚にボラがあります。慣れないと見分けにくいかもしれませんが、アユが細身で体を全体にくねらせるように泳ぐのに対して、ボラは体が太短くて頭が大きく見え、体をくねらせるというより尾ビレと胸ビレを活発に動かしながら泳ぐので区別できます。

今年も横須賀市内の川でアユの姿を観察できるでしょうか？ 散歩や買い物のついでにでも、お近くの川をのぞいてみてはいかがでしょうか？

（海洋生物学担当 萩原）



シラスに混じって漁獲されたアユの稚魚



前田川で採集された全長20cmを超えるアユ



石についたコケを食べるアユ



川を上るボラの幼魚



古代、文字の読み書きはエリートの証？

エジプトのヒエログリフ、インダス文明の楔形（くさびがた）文字、中国の甲骨（こうこつ）文字など、世界各地で発明された「文字」は文明の発展に不可欠でした。なぜなら、それまでの口伝（くでん）という個人の記憶にたよる曖昧さから脱却し、文字で記すことにより誰でも客観的な情報が時間・空間を超えて共有可能となったからです。文字による記録は人や家畜、物資などの管理・輸送を容易にし、報告・命令における正確な意志の伝達なども可能としたのです。

日本における最古の文字資料については諸説ありますが、全国的に文字が普及するのは奈良・平安時代などの古代からです。金属製の骨壺や墓誌、石碑などに文字を刻んだ金石文は少なく、土器に所属先などを記した「墨書（ぼくしょ）土器」、役所に荷物を送る際の荷札である「木簡（もっかん）」などが遺跡から多数出土します。なかには不用になった公文書を再利用し、漆を接着剤としてカゴなどに重ね張りした結果文書が保存され、X線を照射することで解読される「漆紙文書（うるしがみもんじょ）」などもあります。

文字の読み書きは学習方法が高度に整備された現代においても相当の時間と努力が必要です。それでは、古代の文字は誰が書いていたのでしょうか。優雅に歌を詠ん

でいた貴族達はいまでもありませんが、木簡や漆紙文書の内容からみて、そのほとんどは公文書などを作成していた公務員、すなわち都・地方を問わず役人が書いていたと考えられます。つまり古代においては、文字が書ける＝エリート＝役人であったこととなります。ただし、彼ら役人をはるかに超えるスーパーエリートも存在していました。それは僧侶です。経典の読み書きは無論のこと、古代の僧侶は医学・薬学、土木・農業技術、教育・芸術など多方面に精通した豊富な知識と経験を有していたことから、各地で重用されていたのです。

横須賀市内で確認されている古代の文字関連資料は極めて少ないのですが、そのなかで津久井大町谷東（おおまちやひがし）遺跡から出土した平安時代中期頃の須恵器円面硯（すえきえんめんけん）が注目されます。硯（すずり）は墨で文字を書くためだけに使われる道具ですから、この時期津久井浜にはこの硯を使って文字を書いていた役人あるいは僧侶がいた、すなわち役所か寺院が存在していた可能性が高いこととなります。同じ遺跡内の法蔵院付近からは「・蔵寺」と書かれた墨書土器が出土しています。津久井浜に住まいした古代の僧侶がこの円面硯を使って、土器に「・蔵寺」と書いたのでしょうか。

（考古学担当：稲村）



大町谷東遺跡出土「・蔵寺」墨書土器



大町谷東遺跡出土須恵器円面硯

メールマガジン配信中！メルマガに登録して、最新情報をGETしよう！！

展示やイベント、読み物「学芸員自然と歴史のたより」など最新情報を配信しています。

登録は簡単！QRコードを読み込んで、アドレスを入れるだけ！！⇒

①右のQRコードを読み込み、博物館ホームページで「メールマガジン登録・変更・解除ページへ」をクリック。

②「登録・解除フォーム」にE-mailアドレスを入力して「登録」ボタンを押せば登録完了です。

URL⇒ <http://www.museum.yokosuka.kanagawa.jp/mailmagazine>



商店街で「おでかけ博物館」を開催しました



2018年7月13日と14日に、当館の近隣の商店街で「うわまち浪漫灯ろうまつり」が開催されました（主催：上町商店街連合会、共催：横須賀市自然・人文博物館／横須賀市文化会館）。二日間で約4,000人が来場したイベントに、当館は「おでかけ博物館」を出展しました。「灯ろうまつり」へは昨年続き2回目の出展となります。今回の「おでかけ博物館」の内容は、①当館収蔵資料の出張展示と②ワークショップ、さらに③近隣の公共施設による展示・ワークショップ提供でした（②③は13日のみ）。

①では、自然系の出張展示資料セットや商店街の建築様式に関するパネルを展示したほか、埴輪の顔はめパネルや海の生き物の映像を展示しました。

②は2つ行い、「ミュージアムグッズづくり」では、博物館展示に関する様々なイラストをプラ板に印刷し、参加者に好きな形に切ったり字や絵を描いたりしてもらい、熱処理してキーホルダーにしました。「折り紙ワークショップ」では、博物館資料であるマイワイ（万祝：

大漁を祝って作られた服）の折り紙や、クルクル回りながら落ちる植物の種を模した折り紙にチャレンジしてもらいました。

③では、横須賀市文化会館にはワークショップの補助を、横須賀市立中央図書館には絵本の読み聞かせをしていただきました。横須賀市立青少年会館には母親クラブ連絡会を紹介いただき、カラフル輪ゴムを使ったアクセサリーづくりを実施していただきました。横須賀市立豊島小学校には資料室にあった大きな太鼓を展示してもらいました。

この事業を通じて、近隣商店街との連携を深めただけでなく、周辺の公共施設へと連携の輪を広げることができました。当館は横須賀市や三浦半島をフィールドとする博物館ですが、その立地をみると、横須賀中央駅から平坂を上った上町（うわまち）地域にあります。地域の商店街や他の公共施設との連携を深めることは、いずれは当館のイメージを高めていくことにつながると考えています。（昆虫学担当：内船）



「おでかけ博物館」



出張展示のようす



「ミュージアムグッズづくり」

カルガモ親子のお引越し 天神島臨海自然教育園



2018年6月27日、天神島の駐車場に珍しいお客様が現れました。カルガモが1羽うろうろ…耳をすますと子ガモの声がどこからか聞こえます。鳴き声はどうやら側溝から聞こえてくるようで、お引越しの最中に落ちてしまったようです。お昼休憩中のスタッフ総出で救出作業を開始し、4羽の子ガモの救出に成功しました。この後子ガモは親ガモと合流し、お引越しを再開していました。（天神島臨海自然教育園：小長谷）



小ガモを救出！